

コ メ ン ト 2

北 垣 宗 治 先生 (敬和学園大学 学長)

私は十分間、リベラル・アーツ・エデュケーションについて述べたいと思います。そうすると、どうしても自分の背景のことを言わざるをえません。私は旧制の同志社大学で1年間、新制の同志社大学で4年間、大学院2年間と、合計7年間同志社で教育を受けました。修士を取るとすぐ文学部の助手に採用されて、36年間英語英文学を教え、60歳でやめて、今、敬和学園大学という新潟県の、ここから見るとかすんでしか見えないような大学の学長をしております。それで私は、学生時代に同志社で受けてきた教育、そして英米の大学に留学する機会がありまして、留学中、学生として大いに苦しんできた経験、そして教師になってからの経験、そして学長として今日に至るまでの経験、ずっとそこには連続の状況がありまして、断絶はなかったと思っています。

私は、幸いにして1957年にワン・セメスターだけ、マサチューセッツ州にあるアーモスト・カレッジで勉強する機会がありました。なぜアーモストかと言いますと、まず同志社の創立者である、新島襄が1870年にあそこでB.S.という学位を取って卒業したという大学なのです。このアーモスト大学には内村鑑三も新島の紹介によって留学し、シーリーという大変立派な学長から薫陶を受けたことは、彼の『余はいかにしてキリスト信徒となりし乎』の中に詳しく出て参ります。そういう大学で、ワン・セメスターだけでしたけれども勉強する機会がありました。そこではいかにきついカリキュラムで学生を苦しめるかということは留学する前から聞いておりました。私は大西先生と同じく専攻は英文学なのですが、英文学の科目を2科目だけ取りました。しかしその2科目だけでも朝から晩まで勉強に追いまくられて、それでも予習が足りないという状況でありました。一週間に一回ぐらいは小テストがありますし、アサインメントの分量は膨大なものでありました。一週間に何百頁か本を読まないといけなし、またそれに関するレポート、試験、小クラスでの討議等がありまして、結局、追いまくられる状況でありました。たとえばその時に読まれた一つは、ボズウェルの書いた膨大なジョンソン博士伝で、1401ページの本でした。そのようなものを2、3週間で読むことを要求されましたが、私にはとても読み切れませんでした。そういうような経験をして、日本に帰ってきて、教師になってみると、その影響で、今まで日本の大学で受けていた教育は教育の名に値しないのではないかなと思うようになりました。そこでどうなったかと言いますと、大変きつい教師になったわけでありまして、つまり、学生に大量のアサインメントを出す、試験も厳しくやる、ドンドン落とす。私はイギリス文学史を教えておまして、300人いる同志社の英文学科生の中から200人くらいを落としました。それは私が落としたというより彼らが落ちたんですけれども、そのようなことをやっておりますうちに、ふと気がつく自分はいったい何をしているのかという問題なんですね。結局私一人がそれをやっても、あそこにちょっと変わりものの、若い、頭の固い教師がいる。あの先生の授業はなるべく取らない方がよろしい。しかし取らざるをえないのだったら、どうやって取るか、段々年が立つにつれて学生が上級生からノウハウを教わって、合格のための手引きを作っていくというようなことになっていったんですが、結局、自縄自縛になっていきました。私はある時、やっぱりこのやり方は日本では、一人だけではやれないんだなということに気がついて、だんだんと修正を加えていかざるをえませんでした。

私が言いたいことは、アメリカの優秀な大学、アーモストなどは、リベラル・アーツ・カレッジとしては超一流といわれておりますけれども、そういう大学では、学生は普通4科目取ります。どの科目をとってもアサインメントが山のように出る。そして指定された文献を読んでいないと授業についていけない。これはどのクラスでも同じなんです。私の友人で私よりも先に同じ大学に入って経済学をやった男がおりますけれども、その友人が言っていました。同志社大学で一年間かかって習った経済原論は、アーモスト大学では2週間でカバーするんだと。それはなぜかと言うと、そういった本を何冊か読ませて、テストをして、ペーパーを書かすからです。私はアメリカのいい大学の底力というものは大変なものなんだ、そうしてそういうことをシステム化するために、いろいろな工夫がなされている。つまり図書館は晩10時または12時まで開いている。なお勉強する学生のためには夜どおし開いている一室を確保するというシステムなんです。こういったことがなされていることに驚きを感じました。また、小クラス制で大学院の学生をティーチング・アシスタント(TA)に使っている。私は、ハーバード大学にも参りましたけれども、ハーバード

ドでいかにそのTAの制度が生かされているかということも見て参りました。そしてまたハーバードでおもしろかったことは、ここ2年間ぐらいの全科目の試験問題が綴じられて、図書館に備えられており、誰でも見ることができます。したがって、下手な問題を作っていたら、それは学生からも同僚からも批判されることになるということでもあります。

在外研究で1970年代のなかばにハーバードに行っていた時、こういう経験をしました。ある日アダムズ・ハウスで昼食をとっておりますと、友人であります若い中世英文学の助教授が、いつもと違って、汗をぶるぶるかきながら非常に憔悴した様子で食べているのです。どうしたんですかと聞いたら、実は昨日試験が終わったところで、その採点をしている最中だということです。でも、そんなに疲れるのですかと聞くと、ハーバードの制度では試験が終わったら、48時間以内に点数を出さなくてはならない。点数を出すだけでなく、ブルーブックといひまして、ハーバードでもアーモストでもそうですが、ブルーの表紙のついているノートブック型答案用紙を読まなくてはならない。1時間の試験もありますが、2時間以上をかける試験もあります。ぎっしり書かれている、そういった答案を読んで、それにコメントをつけて、学生に返却できるようにする。それを48時間以内にできないと、その助教授は今度、契約更新の時に御払い箱になるんです。自分の首がかかっているわけでありますから、彼がそんなふうにして汗をぶるぶるかきながら、憔悴しきって仕事をしていたのも、もっともでした。教育環境におけるこうしたプレッシャーは、果たしていいものかどうか、批判のあるところだとは思いますが。しかしながら日本の大学には、あまりにもそれがなさすぎるのではないのでしょうか。この点にもっと注目して頑張らないと、日本の大学はどうしてもよくなりません。

従来日本の大学ではカリキュラムの中で一般教育科目と専門教科科目を区別してきました。ところでアーモスト大学ではすべてが一般教育科目なのであって、だからといって程度が低い、ということにはなりません。一科目につき週三回の授業があり、それをこなすには非常な勉強が必要です。私の経験では、アーモストの一般教育科目は、日本の専門教育科目の高度なものをぐんと上まわるほどに高度な内容でした。そうすると、職業教育が主流となる医学部とか工学部といったところを除けば、普通の人文系あるいは社会系の学部のカリキュラムでは、むしろそういう区別をつける理由は何もないじゃないかという気すらしております。私は十分意を尽くしませんでしたけれども、基本的にはリベラル・アーツ・エデュケーションの考え方を、もっと深化させていく必要性を痛感していることを申し上げたかったのです。今日の天野先生のお話を聞けば聞くほど、それをもっと強調していく必要があることを確信致します。